特別寄稿

ジェンダー・フリー社会の多様性――松山東雲女子大学30周年に想う

Women's Choice in Gender-free Society—on the Thirtieth Anniversary of Matsuyama Shinonome Women's College

松山東雲女子大学第２代学長　別　府　惠　子
Keiko BEPPU
（松山東雲女子大学名誉教授、神戸女学院大学名誉教授）

The seed of faith, hope, and love
　planted in great need
is bearing fruits in the land of Dawn.
　Hundred and twenty years come and gone.

いまは、むかし
　播かれし種の
ゆくすえを語り伝えて
　百二十年

「光陰矢の如し」とか、松山を離れてあっという間に15年の歳月が流れました。世紀の過渡期（1999-2007）、桑原キャンパスで過ごした8年の歳月を振り返り感慨無量です。冒頭に引用の詩は『松山東雲学園創立120周年記念誌』[i] 刊行に際して寄せた詩。当時、松山東雲女子大学創立14周年、そして今年30周年。その30年間、桑原キャンパスで過ごしたすべての学生、卒業生たち、教育・研究に携わった教員そして大学運営を支えた職員の方々と、女性の高等教育に専念してきた歳月をともに喜びたいと存じます。

I

21世紀に入ってすでに20有余年。短期大学、四年制大学、さらに大学院に進学する女性は決して珍しくはありません。しかし、いまだに中近東では、女子が教育を受けることが禁じられている国が存在するのも厳粛な事実です。振り返れば、19世紀後半、女性に高等教育をとの遠大かつ火急の必要性に応えて、いわゆる“seven sister colleges”[ii] と称せられる、リベラルアーツ・カレッジがアメリカ北東部に創立され、それに倣って日本でも、女性のための大学が各地に設立されました。ところが、周知のとおり、20世紀も後半になって、女子大学の不要・廃止論が国内外で、世論を沸かせました。すでに昔のできごとになっています。いち早く、「女子教育」の必要（in great need）に応じて、松山東雲学園（1886年）が創立され、「播かれた種」が、短期大学（1945年）、四年制大学（1992年）と成長して枝を張る樹となったのです。その経過の詳細は前出『松山東雲

学園創立 120 周年記念誌』などに譲るとして、筆者が関わった時には、時代の変化で女子大学の共学化が教育界のみならず社会問題として熱い議論がなされ、前出のアメリカの名門女子大学のなかには共学に移行する大学がありました。日本においても、女性の高等教育存続のため共学化に踏み切った大学もあります。そうした、社会情勢の変動は、教育界に大きな「改革」を迫ったのです。本質的な教育理念とはすこしずれた、18 歳人口減少に伴う定員確保という運営上の経済理由が大きな要因だったと理解しています。

Ⅱ

歴史的な女子大学の共学化には賛否両論、共学化の結果もプラス、マイナスがありました。現在では、「共学化」是非論は下火となり不問になっているようですが、筆者が学長の任にあった時期はまだ、女子大学の共学化が高等教育そして運営上の深刻な課題でした。大学運営者は、本来の教育・研究目的そしてその運営に頭を悩ませました。本学では、定員確保の対策として、日本語習得を志望するアジア諸国（韓国、中国、モンゴル、マレーシア）からの正規入学を施行、また、英語を第二外国語とするこれらアジア諸国と英語教育についての共同研究などを積極的に取り入れました（写真）。また、国公立志向、地方都市から首都圏所在の大学への進学者の増加、男女共学化志向が拡大するなか、学生たちが、本学にない専門科目が履修できるよう、近隣の国立大学との「単位互換協定」を締結しました。

そして、ジェンダー・フリー社会への進行を見据え、「従来女性に特化された職種」の多様化に対応すべく、当初の人文学部人間文化学科、言語文化（国際文化）学科 2 学科体制から、1999 年に人間心理学科を増設、一学部 3 学科体制を敷きました。さらに、大学教育をめぐる改革と急激な時代の要請に備え、人文学部改組に取り組み、2007 年から、「人文学部」改め「人文科学部」とし、心理子ども学科、国際文化学科 2 学科に編成し、新設の子ども心理学科は、短期大学との緊密な連携・協力を射程に入れ、心理学、社会福祉学、教育学に加え、保育学をと、専門領域を拡げて、少子高齢化社会 / 時代に対応できる学問領域の充実を目指して、学部名称変更、新設学科申請のため、文部科学省に出向いたことを思い出します。

それから、すでに 15 年。加速する時代、社会情勢の変動に呼応して、本女子大学の教育課程もより現状に則したものに改組、編成（現代ビジネス学科、栄養食物学科を増設）が繰り返されるのを、退職者として遠くから見守ってきたのです。しかし不思議に、筆者の知る限り、共学化への移行は深刻な話題にならなかったと記憶しています。それは、短期大学、女子大学ともに、学園建学

精神の根幹にあるキリスト教主義教育「信仰、希望、愛」という理念の賜物と、「松山」というユニークな地域性に支えられているからだと考えます。国立愛媛大学、私立松山大学、共学化となった聖カタリナ大学などを擁した、松山という教育 / 文化コミュニティーに負うことが大きいと考えます。そのなかで、女性に特化したリベラル・アーツ大学として、高校生へ多様な選択肢を提供してきたからです。

Ⅲ

ジェンダー・フリー時代に適応した教育体制では、ジェンダーレス（男性、女性の違いの否定）でなく、男性、女性、多様な性向（LGBT）の個を平等、公正に許容した上で、自由かつ責任ある人格の育成を目指しているからです。人文学＝「ヒューマニティーズ」が軽んじられる昨今、大学で教養が身につかないとの苦言をしばしば耳にします。リベラル・アーツ教育は、人が人であるために、不可欠かつ重要な学問領域。アナログからデジタル社会に大変身するいま、IT 教育、AI 活用は確かに生活をより豊かにする道具ですが、それを使用するのは、知性、感性を有する生身の人間であるのですから。

おわりに、長い歳月に熟成された、松山という地域文化に本女子大学生たちが「播いた種」――復元庚申庵の由来を述べて本文を閉じたいと思います。松山輩出の俳人栗田樗堂の草庵の復元契機となったのが、松山市が企画した「チャレンジ松山 21――学生による政策論文」（2000 年）に応募した学生たちの論文「薄れゆく、松山の俳人栗田樗堂」。同論文が最優秀賞を受賞、彼女たちの提案に応えた松山市政のヴィジョンとその施策の果実が、NPO 法人庚申庵倶楽部に結実したのです。[iii] 味酒町に復元された庚申庵に設置された同倶楽部は年 2 回の会報刊行、ほか多様な文化講演会やイベント、フィールド・トリップを企画し、地方、国を越え、俳文学に代表される地域文化の普及に貢献しています。（2013 年には日本文学研究者ドナルド・キーン氏を名誉会員に登録。）

これからも、庚申庵倶楽部の英文名称（Green Culture in Matsuyama）が明示するように、身辺の環境保全とその育成に配慮した視点、敢えて言うなら、「女性」特有の視点、思考から芽生えた、ジェンダー・フリー社会における広く、多様な選択を前提に倶楽部の活動が期待されると確信しています。

注

i　『松山東雲学園創立 120 周年記念誌』（120 周年記念誌編纂委員会、2006 年）。

ii　Barnard, Bryn Mawr, Mount Holyoke, Radcliffe, Smith, Vassar, Wellesley の 7 大学。現在、Vassar は 1969 年に共学、Radcliffe はその一部だった Harvard に 1997 年に合併され、現在は共学。Barnard も Columbia と合併して共学。

iii　詳細は松山市の広報誌ほか参照。また、拙書『回想録――生かされ、生きて七十年』（キリスト新聞社、2013 年）の第 5 章「随想――松山つれづれ」をご参照ください。